

住友剛『新しい学校事故・事件学』

子どもの風出版会 2017年

齋藤尚志

起きてしまった悲しい学校事故・事件に際し、あなたならばその原因究明と被害者家族・遺族の救済において何を、どのように進めていきますか。教員として、研究者として、保護者・地域住民として。読みながら、そう問いかけられていた。

著者はこの本で最も取り組みたかったことを「私は徹底的に『実務』や『現場』にこだわるのところから、学校事故・事件の事後対応、特に調査（検証）作業のあり方について考えてみたい」（序章）という。あるいは、「私は従来の学校事故・事件研究とはまた異なる切り口、つまり遺族・家族の相談・救済の『実務』や、実際に重大事故・事件が起きた『現場』の調査・検証の『実務』へのこだわりを前面に出して、自分が経験してきたことをふまえながら、新たな学校事故・事件研究の枠組みをつくっていきたいと今、思うのである」（第1章）とも。

「遺族・家族の相談・救済」と「実際に重大事故・事件が起きた『現場』の調査・検証」の「実務」へのこだわりのもと、著者は遺族・家族の傍らに居つづけ、関係者の「間」に立ち、関係を紡いできた。それゆえ、遺族・家族と学校・教育行政との事後対応における認識のズレに着目し、「起きた悲しい出来事と向き合い、学校を再出発させたい」人びとと「事態の沈静化」や「日常性の回復」を優先的に考える人びとに気づいた。そしてその存在を認め、これまでの学校の「危機管理」論、とくに「緊急支援」に関する議論が後者の人びとの思いに受容され、事故・事件の事実経過の調査・検証や被害

者家族・遺族の「二次被害」を後押しすることになったと指摘する（第2章・第3章）。

著者の今後の事後対応の基本的な方向性は明確だ。「子ども」を核にした重大事故・事件後の学校コミュニティの再生〉であり、それは〈「事実経過の調査・検証をふまえ、再発防止策の実施を求めたい」と願う人々のつながりの構築〉をはかることである。

この方向性に即して、文部科学省「学校事故対応に関する指針」は「事態の沈静化」を念頭においた従来の事後対応ではなく、「事実を明らかにして、共有する」ことを前提とした新しい事後対応となると位置づけられ、読み解かれていく（第4章～第7章）。

著者の「実務」へのこだわりは随所に示される。たとえば、研究者・専門職には「事実と向き合う知的な誠実さ」を要求する。「『指針』は運用次第で大きな効果を発揮しうるものであると同時に、扱いを誤ると事実を隠すための装置にもなりうる」ものであるとし、「自分たちの調査結果や再発防止策が遺族・家族にどのように受け止められ、そして、どのように当該の学校コミュニティで定着していくのかまで見届ける覚悟が、調査委員会にかかわる研究者・専門職には必要である」とされる。加えて調査委員会委員の三つの条件も提示されている。

また著者は「初期対応」の時点からの「記録の保存」を関係者間の「記憶の共有」という観点からとらえる。被害者家族・遺族の傍らに居つづけてきた著者は、「遺族・家族の時間の流れ」と「学校・行政の時間の流れ」には違いが

あるという。そして関係者間の「記憶の共有」という観点より、重大事故・事件の再発防止等の取り組みにおける「過去の事例を参照し、くり返しそのことを語り、記憶の風化を防いでいく営み」には「死者として生まれる」「死者を育てる」（鷺田清一の表現）という側面があるとする。そして「このように、起きてしまった悲しい出来事に対して、学校や教育行政が遺族側の時間の流れ、あるいは記憶の風化を防ぐ営みにとって必要な時間の流れを意識した取り組みをできるようにしなければ、いつまでも遺族側、あるいは記憶の風化を防ぎたいと願う市民の側と学校・教育行政側との間に認識のズレが生まれてしまうであろう」と問題提起する。

気になった点も一つ。「学校事故・事件研究」についても、たとえば公教育のシステムの不調や劣化、破綻を指摘するだけにとどまる議論からは一線を画し、その議論の枠組みから自由に

なって、早く『次の課題に取り組んでいきたい』ところである」という。「公教育のシステムの不調や劣化、破綻を指摘するだけにとどまる議論からは一線を画し」た上で、著者が描く「現場」と「実務」にこだわった新たな公教育システム、悲しい学校事故・事件が起きてしまった際に〈「事実経過の調査・検証をふまえ、再発防止策の実施を求めたい」と願う人々のつながりの構築〉が当たり前になされるような公教育システムとはどのようなものなのであろうか。

とはいえ、「遺族・家族の権利保障」という観点からの「指針」解釈や、組体操事故に対する、子どもの実情に即した「豊かな教育実践」と「安全確保策」の実施の両立を図ろうとする教職員の動きが高まるような働きかけの方法の提示など、秀逸な解釈や提言に学びたい。学校・教育に関わる人にとどまらず、幅広く多くの人に手に取ってほしい一冊である。